
血の祭り

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血の祭り

【Nコード】

N3009T

【作者名】

あると

【あらすじ】

二丁のクロスボウを携え、悪魔狩りの男は故郷の街に帰ってきた。

(前書き)

Diablo3のクラスであるDemonHunterのイメージ作品です。

2011. 5. 15現在、開発中のネットゲームですので、設定等が異なる場合があります。

荒野は果てしなく続いている。

朽ちた木々は、森の名残か。砕けた岩々は、人の住んだ残滓か。

蔓延る魔物の群れは、間違いなく戦いの薫風だった。

醜い鬼の額から突き出て来たのは、角ではない。悪魔の脳髓に濡れる太い矢尻である。あわてふためいた魔物たちの命が、ひとつ、またひとつと消えてゆく。汚らわしい残響を残して、倒れ伏していた。

やがて、すべての命が流れきり、乾いた大地が魔界の血を啜り始めた。

大地に味覚はない。どんなものでも吸い尽くし、自らの養分とする。それが、自然界の法則だ。

男は、二丁のクロスボウを腰に吊り落とした。魔物を射殺した黒い牙は、彼に従順だ。

血の海を歩いて渡った。長靴が憎しみに満ちている。フードの奥に光る目も、冷酷な色を湛えていた。

壊れかけた案内板があった。確かめるまでもない。行き先は、彼が住んでいた街だ。今は廃墟と化し、悪魔たちの住処となっている。

「戻ってきたぞ」

街の上空を怪鳥が旋回していた。そいつがけたたましい叫びをあげる。男の訪れを誰かに告げているようだった。

「さあ、祭りを始めよう」

炎が悪魔の皮膚を焼いた。突き立った火矢から燃え移ったのだ。体内に蓄えた脂肪を燃料として、死ぬまで燃やし尽くす。人間を食らい、太った魔物にはお似合いの最後だ。

悪魔の集団の中に炸裂するボルトを打ち込み、何体かを粉微塵とした。それでも、襲いかかってくる化け物は後を絶たない。

用意した矢はまだあったが、予想以上に数は多かった。雑魚どもを相手にしてはきりが無い。統率する魔物のリーダーを潰すことを優先したほうが得策と考えた。

三区画先の鐘楼を見上げた。子供の頃、あそこで街並みを見回したことは数知れない。記憶の中の街に思いを馳せた。

親玉がいると思われる当たりがついた。化け物の常として、大きな屋敷に居を構えるはずだ。つまり、街の有力者の家だ。そんなところは、ひとつしかない。

通りを行くのではなく、家々の屋根伝いに距離を稼ぐことにした。そうすれば、敵は鳥の怪物だけだ。クロスボウの格好の獲物たちである。

男は、手近な家に飛び込んだ。

風が鳴った。

背後で追ってきた魔物の悲鳴がした。身を低くした体勢のまま見ると、悪魔の土手っ腹に数本の矢が埋もれていた。

「あら、新しいお客さんね」

逆さまの視界に、銀色のクロスボウを構えた女が立っていた。

「お前は」

「お、ま、え？」

銀の矢尻が額に向けられた。蔑むような冷たい視線が落ちてくる。

「君もハンターか」

「そのようね——閉めて」

女の矢が侵入しようとした小鬼を射殺した。男は飛び起きて扉を閉め、手近のがらくたで扉を塞いだ。

「こんなところで、何をしている」

「悪魔を狩る以外の用なんてあるの？」

人を小馬鹿にする態度に、男は眉を寄せた。あまり関わりになってもよいことはなさそうだ。

「そうか。じゃあな」

「待ちなさいよ」

階段に足をかけたところで呼び止められた。

「ねえ、さっきので矢が尽きちゃったんだけど、余ってたらくれない？」

「余分なものなどない」

「ろくでなし！」

絶句した女の表情がいい気味だった。

屋根の上を駆けた。着地し様、クロスボウを放ち、襲いかかってきた怪鳥を射落とした。

「どこに行くのよ？」

「狩りだ。当然だろう」

息を切らすことなく、ついてくる女に少なからず驚きを覚えた。矢を撃ち尽くして足止めを食らうくらいだから、未熟なハンターだと思っていた。だが、体力はそこそのものだった。

「憎たらしい男。闇雲に突っ走っても囲まれるだけよ」

女の言葉どおり、地上の魔物たちが一点に集まり始めていた。男が向かう先と同じだ。

「ボスのところに行く。今なら、逃げられるぞ」

反対に走れば、女の実力でも逃げ切れるはずだ。

「あいつの場所がわかるの？」

「ああ」

男は走る速度をあげた。雑魚どもがたどり着くよりも先に、駆け抜ける必要があった。街の悪魔すべてを相手にはしきれない。

「俺の生家だ」

「なんですって？」

逃げ出すと思った女がついてきた。黙っているところをみると、喋るのもきついのだろう。それほどの速さで駆けていた。

屋敷のバルコニーに飛び込み、そのまま玄関ホールに飛び降りた。昔と変わらない。

玄関の扉に門をかけ、再び階段を駆け上がった。この先だ。女が待っていた。

「早く入って」

滑り込むと、後ろで女が扉を閉めた。鍵のかかる音がした。

「おい、なんでお前が鍵を持っている」

家の鍵は、家族しか持っていないはずだ。

「よく見てよ」

女はフードを落とした。男と同じ瞳の色だった。

「馬鹿な、死んだはずだ!」

女に妹の面影を見た。

「兄さんも」

泣き顔が笑う。

兄妹二人して、お互いが死んだものと思っていた。それもしかたがない。悪魔の軍団に滅ぼされた街で、自分が生き残ったことだけでも奇跡なのだ。

「行くか」

「ええ」

女は銀の牙を輝かせた。

男は両手の黒い牙を剥き出しにした。

今度は奇跡に頼らない。

力づくで運命を切り開くのだ。

復讐に燃える二人の血生臭い祭りが始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3009t/>

血の祭り

2011年10月8日01時53分発行